

日本統治下における台湾南部の日本人教員に関する研究
— 公学校校長黒川亀吉のライフヒストリーを手掛かりに —

陳 虹彬

平安女学院大学研究年報 第20号 抜刷

(2020年3月)

日本統治下における台湾南部の日本人教員に関する研究

— 公学校校長黒川亀吉のライフヒストリーを手掛かりに —

陳 虹彪

要 旨

黒川亀吉は群馬生まれで1899年に日本統治下の台湾へ渡った日本人教員である。1920年11月に病気で亡くなるまで、台湾の南部と離島の公学校に勤めていた。最後の勤務校となる高雄の瀾濃公学校では分校設置などに携わり、地元からも信頼されていた。死後、地元住民によって記念碑が建設され、瀾濃公学校の生徒たちも毎年命日にお参りに行っていたそうである。2015年に、戦後所在地がわからなくなっていた記念碑が発見され、「黒川校長」の存在は再び注目された。しかし、現在発表されている黒川に関する記録に疑問が多数残されているため、本稿は黒川校長のライフヒストリーを手掛かりに再調査を行い、彼の功績と地元に与えた影響を明らかにしたものである。

〔キーワード〕 台湾、植民地教育、公学校、教員史、郷土教育

はじめに — 「故黒川先生の碑」の発見

物語の始まりは台湾高雄市美濃区のある山に佇む一つの記念碑の発見である。

2015年に、当時まだ大学院生の陳威潭が美濃周辺の山と周辺地域の調査で偶然「美濃鎮誌」の記述を読み、地元の「月光山」という山に日本統治期の美濃公学校校長黒川亀吉の記念碑が建てられたことを知った。しかし、当時記念碑の確実な所在地は誰もわからなかった。彼は月光山辺りをめぐり、周辺に住む公学校の卒業生たちに聞き取り調査をした¹⁾。昔黒川校長の命日に学校の先生に記念碑の所へ連れて行かれたことがあると覚えている人は何人もいた。

最終的に、陳威潭は月光山ではなく、「双峰山」の山腹にある田尾坑付近で記念碑を発見した。当時連絡を受けた地元の美濃国民小學(旧美濃公学校)の楊瑞霞校長は直ちに教職員を連れて記念碑の整理をしに行った。さらに、楊校長は公学校時代と同じように、黒川校長の命日に学校生徒を連れてお参りに行くとも話していた²⁾。後に判明したのだが、この記念碑が再発見された日は、黒川校長の命日と同じ11月22日であった。このような偶然もあり、黒川校長記念碑の伝説はさらに地元で盛り上がり、台湾のマスコミにも紹介されたほどであった。

地元の言い伝えではこの記念碑はお墓と記念碑が一体となっているものが、実際は単なる記念碑であることは陳威潭が行った調査で³⁾分かった。日本統治期にお参りに来ていた公学校の生徒たちはまだ幼かったので、記憶に行き違いがあったのではないかと推測されている。また、この言い伝えは1997年に編集された「美濃鎮誌」によるものだが⁴⁾、この資料によれば、黒川校長は1917年に着任してから、わずか2年後の1919年に病氣療養で台湾の北部へ移ったとも記述されている。黒川死後、当時瀾濃公学



校の日本人教員二名がその遺骨を美濃に持ち帰り、遺書を全校生徒の前に読み上げたとの記録もあった。遺書の内容については、美濃の生徒たちのことが気かりで、死後美濃の街を俯瞰できる月光山に埋めてほしいという内容だそうである⁵⁾。しかし、遺書の内容をはじめ、病氣療養や在任期間等の記述の根拠は示されておらず、さらなる検証が必要であると思われる。

なお、台湾では戦後、日本統治期の日本人教員と台湾人の教え子が連絡を取り合い、同窓会をする話はよく聞くが、当時から日本人の先生の記念碑を立てていたことは珍しい事例である。黒川亀吉という日本人校長はいったいどのような人物で、なぜ記念碑を立てるほど地元住民に慕われていたのかについて、記念碑を発見した陳威潭も台湾総督府文書と台湾日日新報等を使ってその理由を調べたが、まだ疑問や不明な点が多く残されている。

本稿は現地の龍肚国民小学(小学校)及び記念碑発見者の陳威潭に資料提供をいただき、渡台前の黒川亀吉校長の経歴から、渡台後台湾での教育経歴等について調査を行い、そのライフヒストリーから台湾の南部で植民地教育を担っていた日本人教員の仕事とその影響を明らかにしたい。

1. 渡台前の経歴について

黒川が台湾に渡る前の経歴について調べる時に、唯一の手掛かりは台湾総督府文書に残されている本人執筆の経歴書である。この履歴書は黒川が一度病気で退職し、回復後に復職を申し入れたときに提出した資料の一つである⁶⁾。履歴書は計3枚あり、本人の生年月日から出身、本籍地も記されている。中身について、渡台前の部分は学歴、資格の取得、職歴を中心に書かれているが、渡台後の記録では勤務校も記入されている。ただし、この履歴書は彼が復職申請するまでの経歴しか記入されていないため、本稿で述べられる黒川のその後の経歴は主に台湾総督府の職員録及び地方の官報によってまとめたものである。

(1) 履歴書でよむ黒川の出身と渡台前の経歴

履歴書の記録によれば、黒川は1866(慶応2)年4月生まれの子族出身で、本籍地は群馬県碓氷郡安中町にあるとしている。この履歴書は台湾総督府文書に保存されている公式な文書なので、これを根拠に台湾で発表された記事等ではすべて黒川が「明治時期の子族出身である」と述べ、子族として生まれ育ち、台湾の教育にも貢献する人格者だと記述されている。しかし、この記述は2019年に台湾高雄市龍肚国民小学(小学校)で行われた資料調査で訂正されることとなる。

龍肚国民小学は1920(大正9)年に黒川が当時校長を勤めた瀨濃公学校(戦後は美濃国民小学)の分校として創立され、後に独立して龍肚公学校となった日本統治時代からの小学校である。記録上、分校時代の校長は黒川であったため、学校沿革史の整理をきっかけに黒川についての調査が行われた⁷⁾。龍肚国民小学が調査のために入手した黒川の戸籍記録には、黒川亀吉は1887(明治20)年21歳の時に群馬県碓氷郡安中町の子族黒川家に養子入りをし、生家は同じ碓氷郡の原市にあり、旧姓は水上と記されている。

幼少年期の学歴については前述の履歴書にも記されていないが、1885(明治18)年12月に中等科教員免許状を受領、1886(明治19)年1月に小学六等訓導を拝命したとの記述から、養子縁組入り前は教職についていたことがわかる。それから、1887(明治20)年1月に黒川家に養子入りをし、同年の7月に学校を学術修業のためという理由で依願退職したのち、ただちに1887年の9月から京都の同志社英学校(のち同志社普通学校)に入学し、同時に警軒阪田丈平に就き、漢学の修業も始めたのである。

履歴書の記録によれば、彼が同志社に在籍したのは1887(明治20)年9月から1890(明治23)年9月までの4年間であった。筆者が同志社大学の図書館に黒川の学籍記録について問い合わせたところ、確かに黒川亀吉の在学記録はあったが、卒業生名簿には載せていなかったため、おそらく中途退学で

はないかとの返事がきた。確認したところ、当時同志社普通学校の修業年数は5年だが、黒川は4年間で群馬に戻ったので、確かに卒業はしなかったのである。

黒川は群馬へ戻った後、1891(明治24)年4月から群馬県安中高等小学校で英語を教え、1892(明治25)年9月に小学全科教員仮免許状を受領した。のちに1893(明治26)年2月から群馬県安中尋常高等小学校訓導本科の正教員として勤務することとなった。1896(明治29)年5月に安中尋常高等小学校補習科の教務を嘱託され、9月に正式に小学校教員免許状を受領した。1897(明治30)年3月末に全戸東京へ移転するために依願退職するまで、高等小学校の教員として勤めていた。なお、戸籍によれば、同年の5月25日に前戸主隠居のため、黒川亀吉は黒川家の家督を継いだと記録されている。

東京へ引っ越し後に、黒川は教員ではなく、1897(明治30)年6月に内務省社寺局、1898(明治31)年5月に内務大臣官房文書課、1899(明治32)年3月末から造神宮使庁などで転々と勤務をしていた。どういつなかりで雇われたか、職務内容についても不明のままだが、給与は群馬での教員時代と同じレベルの金額をもらえており、昇給や賞与も毎年あったことが履歴書の記録からわかる。そんな中、1899(明治32)年9月に黒川は台湾へ渡るために造神宮使庁の仕事を退職した。同年9月22日台湾の国語学校の講習員として入学してから、1920(大正9)年11月22日に病死するまで台湾で過ごした。

ここまでは黒川の履歴書と戸籍資料を基に彼の渡台前の経歴を整理した。黒川は養子で士族の身分を得たが、教員免許の取得から養子入り後の同志社への入学まで、彼の学問や教育への意欲が伺われる。しかし、なぜ彼は21才で養子入りをしたか、同志社英学校への入学は何の意味を持っているか、なぜ突然に東京へ移ったのか、またなぜ台湾へ渡ることを選んだのか。この一連の動きが一つでも違っていれば、黒川は台湾へ渡り、台湾の南部で教鞭をとることもなかったであろう。これらの謎を解くため、彼の出身地である群馬の安中町を手掛かりに調査を進めた。

(2) プロテスタントとしての一面

黒川の戸籍資料と履歴書の内容を基に、群馬県の安中町、同志社等のキーワードで安中教会史を中心に関連資料を調べなおした。そこで、黒川はキリスト教の信者、いわゆるプロテスタントであったことが判明した。

前述のように、黒川亀吉が黒川家に入籍する前の旧姓は水上であり、黒川家に養子入りした後、父となるのは黒川昌寿、母はみなである。安中教会史の記述によれば、1878(明治11)年3月に新島襄が海老名弾正を帯同し、安中へ向かい、30日の集会で受洗試問会をし、31日に「公開設立」の式を行い、30名の受洗者を得ているとの記録がある。これらの初代信者の中に亀吉の養父となる黒川昌寿とその妻みなの名前があった⁸⁾。また、安中教会史の最初に掲載している写真の中に、「安中基督教会々員名簿明治44年8月」(柏木義円の筆による)という写真がある⁹⁾。その名簿にも「永眠 授洗者：新島襄 受洗日：明治11年3月30日 住所：安中 妻：みな 姓名：黒川昌寿」との記録があった。

設立後の安中教会はしばらく無牧状態を経て、1879(明治12)年12月から1884(明治17)年10月までは同志社神学校卒の海老名弾正が牧師を務めていた。この時期の教会史によれば、海老名の伝道プログラムは安中を中心に、碓氷郡及び南北甘楽の三郡まで及んでいた。彼の在牧期間中に受洗した信者が多かったが、1881(明治14)年1月2日の記録では「水上亀吉(大竹)」という名前があった¹⁰⁾。同日に受洗した名簿の中には柏木義円の名前もあった。この水上亀吉が黒川家に養子入りする前の亀吉であれば、これが亀吉のプロテスタントとしての最初の記録となる。同じ安中教会に所属することで、黒川家への養子入りのきっかけともなり得る。

「黒川亀吉」という名前が初めて安中教会史に現れたのは『安中教会日記』の記録であった¹¹⁾。最初に黒川亀吉の名前が出てきたのは明治26年度の執事投票結果である。この時亀吉の得票数は9票

で第2位であったが、最終的には得票第3位と第4位の橋本惟孝と久保庭元七が執事に決まった。その後、翌々年度の執事選挙で、亀吉は第2位の得票数で橋本惟孝と明治28年度の執事に当選した。

亀吉の執事在任中、橋本惟孝と安中教会会議規程の修正を担当し、積極的に教会の運営と組織の改善に取り組んでいた¹²⁾。しかし、時は「1891(明治24)年以降のいわゆる「新神学論争」による動揺と全国的な教勢不振に入ってゆく」という時代であるうえ、この時期の安中教会は牧師不在の状態が続き、数名牧師を招聘して着任しても、すぐに辞めていくという事態が繰り返されていた¹³⁾。黒川と橋本が執事を務める年の増野牧師も11ヶ月で教会を去った。『安中教会日記』の解説によれば、この時期に転属もしくは退会を申し込む信者も多かった¹⁴⁾。

このような背景で、教会の改革に取り組もうとした橋本と黒川だが、翌年の明治29年度の執事選挙で二人とも1票しか得られず、落選となった。黒川が執事を務めたのはわずか1年間だけであった。落選が決まったのち、黒川亀吉の名前は一度だけ教会の議会出席記録にあったが、その後彼の名前は出てこなくなった。

そして、黒川の履歴書によれば、彼は1897(明治30)年3月末に東京へと全戸移転したのである。東京へ移転した黒川は教会活動を続けていたかどうかを探るため、関連する東京の教会の教会史を調べてみたが、残念ながら、黒川亀吉一家の記録を見つけることができなかった。

安中時代の黒川亀吉の経歴をたどってきたが、まずは黒川家への養子入りについて検討してみよう。21才で養子入りしたということは、婿養子である可能性は十分にあるが、入手した戸籍記録を見る限り、それを断言するができなかった。しかし、黒川家の養子になって間もなく同志社の英学校に入学し、最終的に家督を継いだことから、同じプロテスタント信者で家督を継がせるための養子縁組でもあり得ると考えられる。特に養父の昌寿は安中教会の初代信者で、安中教会を作り上げた新島襄とも付き合いがある。将来家督を継がせるために、同じ安中教会の優秀な青年を養子にすることは十分に考えられる。しかも、同志社英学校に入学させ、あと一年で卒業というところで、新島が亡くなった年に退学して群馬に帰ったことから、黒川家のプロテスタント信仰は新島の影響を深く受けていることがわかる。亀吉の立場から言えば、黒川への養子入りは士族の身分と同志社への進学の手に入れることができた。もちろん、自分自身も安中教会の信者であり、同志社英学校に在学した亀吉も昌寿と同じ新島の影響を受けていると考えられる。また、平民出身の亀吉であったが、同志社で受けた英語教育と京都での漢学の修業は本当の士族へ近づくための修業でもあったのではないかと思われる。同志社英学校の入学前から教職を務めていた亀吉だが、その教育思想にも新島の影響を受け、後日台湾での教育経歴にも影響しているのではないかと推測できる。

2. 渡台後の教職経歴

東京へ移った後の黒川だが、教会活動を続けていた痕跡がなく、教職からも離れたようにみえた。しかし、東京へ移ってから約2年半後の1899(明治32)年に台湾へ渡ることが決まったのである。

(1) 渡台のきっかけ：台湾総督府国語学校の講習員募集

台湾が日本の植民地統治下に入った最初の数年間、伊澤修二によって台湾人に日本語を教える国語伝習所が設置されたが、その教育にあたる教員が足りなかった。当時教員養成のための国語学校の設立も決まっていたが、正式に教員養成ができるまでの過渡期において、伊澤修二は日本から「講習員」の募集を始めた。日本から植民地台湾での教育事業を担当できる人材を台湾に連れてくるということであった。この「講習員」事業は統治初期にしばらく続き、合計7回の募集があった。この台湾総督府国語学校の講習科講習員募集について、1回目は公開募集だったが2回目は各府県から2名を推薦してもらう等、募集方法を状況に応じて変更していた¹⁵⁾。選抜条件には高等小学校の教員免許を

所持するなど教職経験者であること、給料面もかなり優遇されていたので、1回目から募集者は殺到した。ただし、募集人数は数十名のみで、優秀で即戦力になれる人材を選抜している。また、応募する人も当時未開化といわれている台湾の状況がある程度分かっており、命を落とす覚悟をして国のために応募したという人もいるようである¹⁶⁾。講習員の選抜に合格した人は台湾に到着後、数か月の講習を受けた後に教員免許を取得し、当時台湾での教育上の需要により赴任先も決められた。講習の内容は主に日本語教授法と講習員への台湾語(土語)教育であった¹⁷⁾

黒川が参加したのは第5回の講習員講習であり、1899(明治32)年9月に入学した29名で卒業したのは25名であった¹⁸⁾。同期の修了者の大半は台湾人児童が通う各地の公学校に派遣された。黒川に関しては、最初から台湾の南部にある台南へ赴任先が決まり、その後、台湾で病死するまで南部の学校に勤めていた。

南部での勤務は何を意味しているか。当時植民地統治の中枢である台湾総督府は北部の台北にあり、南部へ行くほど開発も遅く、特に統治初期では病気などで命を落とす確率も多かったと思われるようである。そんな中、黒川は離島の澎湖庁媽宮公学校にまで赴任し、病気で依願退職するまで台湾を離れなかった。

(2) 台南、離島での勤務と1回目の病氣療養そして復帰

国語学校を卒業してすぐ、黒川は台南の大目降公学校へ赴任した。後に台南の関帝廟公学校へ転勤し、また離島澎湖庁にある媽宮公学校へ赴任した。媽宮公学校に在任中、黒川は日本人が通う小学校の校長や各種の委員も兼任し、かなりの激務であった。1907(明治40)年末に腹部に異常があり、「熱帯地方性赤痢(アメーバ赤痢)」と診断された。治療を受けて命の危険はなかったが、体が衰弱し、肝膿瘍等を併発する危険もあるので、1908(明治41)年3月に医者診断のもとで退職をした。

翌年の1909(明治42)年の1月に体調が回復したとのことで教職に復帰し、阿緱庁の東港公学校へ赴任した。4月に阿緱庁茄苳脚公学校長に任命され、茄苳脚公学校へ転任した。8年間茄苳脚公学校に勤めた後、1917(大正6)年4月から阿緱庁の瀾濃公学校へ移った。

3. 瀾濃公学校勤務時期の「黒川校長」

最初に述べたように、現在発見・発表されている黒川校長に関する記録は主に記念碑の発見に関連するものである。その記念碑は1922(大正11)年から瀾濃公学校の生徒たちが毎年秋祭の行事として、黒川校長の命日にお参りに行っていた。現在、この伝統行事は美濃国民小学に引き継がされ、秋祭＝黒川校長記念碑へのお参りという伝統がよみがえった。また、その記念碑は単なる記念碑であり、黒川校長のお墓ではなかったことはすでに前述の陳威潭の調査で明らかにされている¹⁹⁾。

現在の資料や報告書では、黒川校長が美濃を含む周辺地域の台湾人たちに愛されている理由は、彼の任内に美濃公学校の分校として、美濃公学校の北側、東側と南側に3つの分校を設置したことであると述べられている。この3つの分校はそれぞれ独立し、美濃地域の近代教育の普及に貢献したとされている。それから、すべての資料では、彼が美濃公学校に「わずか2年」しか在任しなかったのに、偉大な功績を残したとしている。しかし、最初に1917(大正6)年5月に授業開始した崧頂分校から、1920(大正9)年4月に設置された3校目の龍肚分校までの時間を計算しても、彼が美濃公学校に最低3年以上勤務したことになる。「黒川校長」という美談の裏にはこのような矛盾した記述が存在することについて、再度資料を精査し、黒川校長の瀾濃公学校での動きを明らかにしたい。

(1) 任期にかかわる謎

まずは黒川校長の任期についての記述を検証したい。台湾総督府職員録を検索したところ、黒川は瀾濃公学校の教諭兼学校長を務める記録は1917(大正6)年度から1920(大正9)年度の4年間である。さらに阿緱序報と高雄州報で辞令を調べた結果、黒川は1917(大正6)年に美濃公学校長に任命されてから、1920(大正9)年11月22日死亡まで転任等の辞令が出ていなかった。しかも、1920(大正9)年4月に昇給の辞令、それから死亡した11月22日の日付で賞与470円を給付する辞令が出ている。同じ日に、当時美濃公学校の土肥淑人教諭が学校長事務取扱として任命された辞令もあった。すなわち、正式に校長代理が任命されたのは黒川が死亡した後の事であった。『美濃鎮誌』で述べられている、黒川校長の遺書を全校生徒の前で読み上げた校長代理はおそらくこの土肥教諭のことである。

この計算であれば、黒川は3年半余り美濃公学校の学校長として在任していたことになるが、なぜ在任期間は「わずか2年」という記述が残されているのか。

資料を再検討した結果、2年間という根拠はおそらく台湾日日新報の記事によるものだと考えられる²⁰⁾。まず、現在の美濃国民小学校を含め、当時黒川校長が関わった近辺の公学校に学校沿革誌の保存は確認されておらず、黒川が自ら残した資料もなかったため、参考にできるのは辞令などの公文書しかなかった。しかし、『美濃鎮誌』等まだ総督府職員録及び州報などの検索も難しかった時代に編集されたものは、台湾日日新報で掲載された記念碑建設事業の記事を根拠に編纂された可能性が大きい。その記事によれば、黒川校長はわずか2年しか在任しなかったと書いているほか、『美濃鎮誌』でも1919(大正8)年から黒川校長は病氣療養で北上したとしている。黒川校長の在任期間は、公式の文書では3年間半、地域の記録では2年間という大きな相違が生じてしまった。

では、2年間という言い方は間違っているのか、そうとも言えなさそうである。まず、もし1年間半も任期の誤記があれば、尊敬される校長先生の名誉にもかかわるものなので、地元の人々は訂正を求めたはずである。むしろ、人望があったからこそ、病氣療養のまま学校と地元は1年以上もその復帰を待っていたのではないかという解釈も考えられる。

それから、後ほど詳しく述べるが、前述した『美濃鎮誌』では、同じ瀾濃公学校の分校の手巾寮公学校は黒川を第一任の校長としているが、1920(大正9)年に分校として設置された龍肚公学校は黒川を第一任校長としなかった²¹⁾。20年以上前から地元で聞き取り調査を続けてきた龍肚国小現任の教頭黄鴻松によれば、学校が創立初期の歴史のヒアリングをしたとき、卒業生たちから黒川校長の名前を聞いたことがなかったとのことである²²⁾。もしそうであれば、黒川校長は事実上長期不在だったという可能性は十分にあると考えられる。

どちらの記録が正しいのか、時代背景などを考えると、新史料が発見されない限り、これ以上の判断は難しいという現状である。

(2) 分校の設置について

次は黒川校長の功績とされている瀾濃公学校の分校設置についてである。前述にも一部説明したように、瀾濃公学校分校3校の設置は地元美濃では黒川任内の一番の功績だと思われる。当時台湾の社会背景として、人口が増えたことにより、就学人口数も増加し、これまでの公学校数だけでは収容できなくなってきた。そのうえ、台湾人も公学校という制度を受け入れ、子供を学校に通わせたいと思う人が増えた。しかし、公学校の経費や運営からすれば、分校を設置するのは簡単なことではなかった。

瀾濃公学校の三つの分校の設置記録をたどると、最初の崁頂分校は黒川の着任と同時に設置されたのであるが、1年間で学級数も増え、2年目で独立した。2校目はその1年後の1919(大正8)年4月に設置された。翌年の1920(大正9)年4月に3校目となる龍肚分校の設置も許可された。

表 1 瀾濃公学校の分校設置について

時間	設置記録	在任校長	備考
1917.5.16	炭頂分校が授業開始	黒川亀吉	阿緞庁報 1917 年 266 号
1918	瀾濃公学校の学級増設 本校：9 学級に 1 学級増設 炭頂分校：2 学級に 2 学級増設	黒川亀吉	阿緞庁報 1918 年 305 号
1919.4.1	炭頂分校が独立して炭頂公学校となる。 手巾寮分校を新設	同上	阿緞庁報 1919 年 363 号
1920.4.1	龍肚分校を新設	同上	阿緞庁報 1920 年 407 号
1921	龍肚分校が美濃公学校龍吐分校に	押上亟助	高雄州報 1921 年 155 号
1922.4.1	龍肚分校は独立して龍肚公学校となる。	押上亟助	高雄州報 1922 年 225 号

実は、黒川が美濃公学校に着任する前から、前任校でも分校の設置に携わっていた。前任校の茄萾脚公学校では、分校の校地を確保したうえで 1916(大正 5)年 4 月に新埤頭分校を設置した²³⁾。1917 年に黒川は美濃公学校へ移ったが、この分校は 1918(大正 7)年 4 月に無事に独立した。黒川は美濃公学校に着任時、すでに分校の設置と運営を経験済みでノーハウもわかっていた。そのためか、炭頂分校は設置した 2 年目ですぐに独立し、立て続けに手巾寮分校と龍肚分校も設置された。しかし、分校の設置は容易なことではなかった。まずは当時公学校の運営体制から説明しよう。

公学校の運営は基本中央、保護者と地元住民の三者共同負担で成り立ち、収入の基本構成は学費、基本財産と協議費の三項目である。この中でも協議費が最も重要である。公学校の運営は基本的に街庄長、庁長と校長が共同で担当し、その運営を支える経費は中央、保護者(学費)、地元住民(協議費)の三者が共同で負担する仕組みとなっている²⁴⁾。その上、学租や寄付金で収入を増やすこともできる。一般的にみれば、学区の地元住民が負担する「協議費(分担金)」が占める割合が最も大きい。

李鎧揚の調査によれば、1915(大正 4)年段階では全島の公学校は学齢児童の 1 割しか収容できていなかった。1920(大正 9)年になっても、就学率は 20.7%にとどまるため、分校の設置や学校数を増やすのは必然の流れであった²⁵⁾。また、公学校への寄付金だが、全島公学校の収入を占める割合は 1919(大正 8)年段階では 1.69% まで下がっている。大半の公学校は資産と基本財産による収入を増やせないうえ、校舎等の増設に迫られ、借入金がどんどん増えていく状況に追い込まれる。総じていえば、1910 年代の特徴は、就学者数と学校数は増加しているのに対し、地方からの補助が増えていない。公学校は借金して校舎を増築するように対処していたが、借金がどんどん増えていくことが問題となってくる²⁶⁾。

学校の運営の視点から、経費が不足している中、分校を作ること自体もお金がかかるが、独立させたら、学区からの協議費収入も減るので、分校の設置に踏み込むかどうかこの時期の公学校が抱える重要な課題でもある。

以上を踏まえ、黒川が赴任後の瀾濃公学校の運営状況を見てみよう。瀾濃公学校の 1916~1918(大正 5~7)年の決算記録を見れば、黒川が赴任する前の瀾濃公学校は寄付金の収入がゼロであった。1917(大正 6)年から金額は少ないが、1919(大正 8)年まで寄付金の収入が入るようになった。1919(大正 8)年以降の寄付状況調査では、美濃庄長の邱義生が寄付している記録も残されている²⁷⁾。前述の研究に述べられた、学校が特別な資産を持っていない限り、大正以降寄付金を募るのが大変困難だという状況に対し、美濃公学校に地元から寄付金が集まるのも地元住民が学校を応援している証拠となる。これも黒川校長が赴任後の変化であった。

また、分校の校地取得について、現吉洋国民小学(旧瀾濃公学校手巾寮分校)が発表している資料によれば、学校の設立には黒川亀吉校長が地元で奔走し、努力した結果であると記されている²⁸⁾。当時、現地は「大正義塾」という書房があったが、黒川が各方であっせんした結果、当時の南隆農場の主事

白石喜代治が無償で校地を寄付し、「大正義塾」に代わって1919(大正8)年4月1日「瀾濃手巾寮分校」が設立されたとのことである。先に校地を確保した上の分校設立は黒川の前任校である茄苺脚公学校新埤頭分校と同じである。

しかし、後にできた龍肚分校はそうでもなかった。1920(大正9)年4月1日龍肚分校創立当時の記録がほぼなく、現職の教頭黄鴻松が20数年前に始めた地元でのヒアリング調査が唯一の記録となる。黄の調査では当時は事前に校地を確保できなかったため、最初は龍肚庄東側の「江屋夥房(客家家屋)」を借りて授業をしていたが、のちに清水宮隣の羅徳原氏家族所有の夥房に移った。その後まもなく鍾照梅氏実家の向こうの土地で六軒の「穿鑿屋(客家家屋の一種)」を建てて臨時教室とした。備品もなかったため、生徒らは毎日自分で椅子を持ち込んで授業を受けに来ていたそうである。翌年、地元の人たちの努力でやっと校地を手に入れ、学区内の住民を総動員して校地の整理に奉公してもらった。龍肚分校は地元住民の手によって建てられたものでもあると黄は述べている²⁹⁾。

龍肚分校が創設された時期、前にも述べたように、もし地元住民の記憶が確かであれば、黒川はすでに病氣療養で長期不在中であつた。もちろん、地元住民が学校の増設を望んでも公学校の校長が受け入れなかったら、分校の設置はできない。地元住民は校長が不在でも分校の設置作業に協力していたことから、地元住民の教育熱心が伺われる。また、当時の台湾児童の就学状況からみれば、分校の設置は地元住民の希望を受け入れてのことでもあつたといえよう。

(3) 逝去後の記念碑事業にみる「黒川校長」の存在意義

分校の設置を通して、黒川は瀾濃公学校の学区住民たちと交流を深め、人望を得ていた。そのため、彼の死後1年で地元の人々が感謝の意を持って黒川先生記念碑を立てたのである。瀾濃公学校(のち美濃公学校)も秋祭という行事を設定し、毎年黒川校長の命日に生徒を連れてお参りをしていた³⁰⁾。黒川校長は生前美濃の教育に貢献し、逝去後も記念碑の設置を通して、精神的象徴として教育の役割をはたし続けていた。

戦後、記念碑の設置場所が忘れられ、長い年月がたってから、美濃で調査を行っていた陳威潭に見された。さらに、現美濃国民学校(旧美濃公学校)の楊校長の働き掛けにより、記念碑は整理され、歩道も作られた。黒川亀吉校長は植民地時代の校長先生ではあつたが、終戦後の今に再び美濃の教育の象徴となっている。このような展開は台湾全島を探してもなかなかない事例である。

なお、分校の設置はなぜ地元の住民の支持を得ることにつながったのかは、教育熱心と評判の客家文化地域である美濃の土地柄でもあると思われる。分校の設置という希望を受け入れ、その働きが認められたうえ、任期中での病氣療養、そして病死したことにより、「黒川校長」への思いを増幅させ、その後の記念碑建設にもつながったと思われる。

おわりに

本稿は黒川亀吉のライフヒストリーを中心にその人生をたどってきた。新たに台湾へ渡る以前の黒川がプロテスタントであつたことを明らかにした。また、これまで発表された黒川に関する資料の再検討を行い、彼が台湾南部の美濃という地域の教育に貢献したこと、そして死後は地元住民によって記念碑が建設され、その記念碑を通して今でも美濃地域の教育の象徴的存在であることについて考察を行った。

この記念碑には、「黒川校長」を記念するだけの意味ではなく、住民が後世に伝えたかった先人への感謝の気持ち、そして教育を重視し、地元のために奉仕する「精神」の伝承も含まれている。群馬から東京へ移し、さらに台湾に渡り、南部の学校を中心に勤務した黒川校長の功績は、日本で記録が残されていなくても、これからも学校を通して美濃地区の人々に伝えられていく。

また、今回の考察過程で浮き彫りになったのは史料の問題である。特に当時の統治の中心部から離れている台湾の南部では、まず資料が残されることも極めて少なかった。日本統治期の学校文書に関する調査はほぼ行われていない。卒業生などへの聞き取り調査に頼るも、本稿で取り上げた黒川の任期間と同じように、その検証が難しく、疑問も数多く残る。しかし、このような地方に着目する研究こそが当時一般の台湾人が受けた植民地教育の「実態」を解明するのに欠かせないものであり、今後も調査を続けていきたい。

表 2 黒川亀吉年表

時間	経歴	所属等
1866(慶応2)年	4.11 群馬県生まれ	
1885(明治18)年	12.7 中等科教員免許状受領	群馬県
1886(明治19)年	1.23 小学六等訓導拝命 月俸8円	
1887(明治20)年	7.31 依願退職(学術修業のため)	1.20 黒川家に養子入り(旧姓:水上)
1887(明治20)年	9月から京都同志社英学校(同志社普通学校普通科)修業/警軒阪田丈平に就き漢学修業	同志社学校普通科(1890(明治23)年9月まで)
1891(明治24)年	4.1 群馬県安中高等小学校英語教授、月俸12円	群馬県
1892(明治25)年	9.1 小学全科教員仮免許状受領	
1893(明治26)年	2.7 群馬県安中尋常高等小学校訓導本科正教員勤務、七等下級俸給与	群馬県安中尋常高等小学校
1895(明治28)年	明治28年度安中教会執事当選	
1896(明治29)年	5.2 安中尋常高等小学校補習科教務嘱托 9.1 小学校教員免許状受領	
1897(明治30)年	3.31 依願退職 全戸東京へ移転のため/6.21 内務省社寺局雇申付、月俸12円/11.3 月俸給13円給与/12.11 職務勉勵につき金10円賞与	5.25 黒川家家督を継ぐ
1898(明治31)年	5.23 内務大臣官房文書課臨時雇 月俸14円/11.3 月俸金17円給与/12.17 事務格別勉勵につき金20円賞与	内務大臣官房秘書課
1899(明治32)年	3.31 内務大臣官房秘書課御用済解雇/3.31 造神宮使庁雇申付 月俸金17円/9.6 職務勉勵につき金20円賞与/9.6 依願免雇(渡台のため)/9.22 台湾総督府国語学校第五回講習科講習員	
1900(明治33)年	1.24 同科卒業証書受領/1.25 台湾公学校教諭免許状受領 台南県へ出向/2.2 臺南縣大目降公學校 給七級俸/3.12 兼任臺南縣關帝廟公學校教諭/7.13 臺南縣關帝廟公學校専任教諭/12.22 職務勉勵につき賞与30円	台湾総督府
1901(明治34)年	9.2 給六級俸/12.23 職務勉勵につき賞与26円	臺南縣關帝廟公學校教諭
1902(明治35)年	12.2 職務勉勵につき賞与40円	臺南縣關帝廟公學校教諭
1903(明治36)年	9.3 給五級俸/12.22 職務勉勵につき賞与45円/12.24 澎湖庁媽宮公學校勤務	臺南縣關帝廟公學校教諭/校長
1904(明治37)年	12.22 職務勉勵につき賞与60円	澎湖庁媽宮公學校教諭/校長
1905(明治38)年	4.25 土語研究会講師/6.27 公学校教員講習員/7.1 通訳兼掌者詮衡委員/7.31 臨時台湾戸口調査監督委員等、澎湖庁第五監督区を担当/8.7 公学校教員講習証書受領/9.22 澎湖庁第五監督区第三調査区担当/12.22 職務勉勵につき賞与60円	澎湖庁媽宮公學校教諭/学校長
1906(明治39)年	3.31 給四級俸/5.19 台湾小学校教諭免許状受領/8.11 台湾小学校教諭台湾小学校長兼任、媽宮尋常高等小学校本科正教員、媽宮尋常高等小学校勤務/12.22 職務勉勵につき賞与60円	澎湖庁媽宮公學校教諭/校長
1907(明治40)年	2.26 免兼台湾小学校教諭台湾小学校長/12.23 職務勉勵につき賞与50円	澎湖庁媽宮公學校教諭/校長

時間	経歴	所属等
1908(明治 41)年	3.18 依願免本官(病氣退職)/3.3 在官 8 年以上の退官により月俸 4 か月分を給与	
1909(明治 42)年	5 月から阿緞庁東港公學校勤務	阿緞庁東港公學校教諭
	11 月から阿緞庁茄苳腳公學校勤務	阿緞庁茄苳腳公學校教諭/学校長(1917(大正 5)年 3 月 31 日まで)
1917(大正 6)年	4.1 阿緞庁瀾濃公學校/崁頂分校勤務	阿緞庁瀾濃公學校教諭/学校長
1918(大正 7)年		阿緞庁瀾濃公學校教諭/学校長
1919(大正 8)年	手巾寮分校設置	阿緞庁瀾濃公學校教諭/学校長
1920(大正 9)年	4.1 給四級俸 1-8 月阿緞庁瀾濃公學校/手巾寮分校、龍肚分校 9 月以降高雄州瀾濃公學校/龍肚分校 11.22 死亡 12.20 事務格別勉勵に付賞与 470 円	瀾濃公學校/教諭/学校長 瀾濃公學校は 9 月から高雄州所管となる

注

- 1) 鄭安晞(研究代表)、「黃蝶翠谷及周邊地區常民生活路徑調查」成果報告書報告書(2016.6)、内政部營建署壽山國家自然公園委託研究、pp37-40。林吉洋「尋找甜蜜巷－黑川校長紀念碑與手作小步道」(20170306)<https://www.newsmarket.com.tw/blog/92630/>、(20191011 取得)。
- 2) 美濃愛郷協進會、「美濃/「黑川校長紀念碑」手作步道工作坊」(20170223)、<https://www.newsmarket.com.tw/blog/92316/>、(20191011 取得)。
- 3) 同上 1。
- 4) 美濃鎮志編輯委員會編、『美濃鎮志』(1997)、p410。
- 5) 同上 4。
- 6) 台湾總督府文書、「黑川龜吉任公學校教諭」(1909-01-06)、〈明治四十二年臺灣總督府公文類纂永久保存進退(判)第一卷秘書〉、《臺灣總督府檔案 總督府公文類纂》、國史館臺灣文獻館、典藏號:00001555007。
- 7) 高雄市龍肚国民小学は 2020 年に創立百周年記念を迎えることをきっかけに学校の沿革史等を整理している。筆者はその協力者の一人である。本稿で使用する記念碑の写真も龍肚国民小学によって提供されたものである。
- 8) 新島学園女子短期大学新島文化研究所編、「安中教会史：創立から 100 年まで」(1988.3)、p 28。
- 9) 同上 8。
- 10) 同上 8、p30-36。
- 11) 同上 8、pp45-77。
- 12) 同上 8、p64-67。
- 13) 同上 8、p76-77。
- 14) 同上 8、p76-77。
- 15) 吳宏明、「日本統治下台湾の日本人教員－台湾總督府講習員をめぐる」、『日本統治下台湾の教育認識－書房・公学校を中心に』第 6 章(2016.3.30)、pp155-176。
- 16) 台湾總督府台北師範学校、『台北師範学校創立三十周年記念誌』(1926.10)、p138-140。
- 17) 王秋陽「台湾總督府国語学校の設立と言語教育の推進」『アジアの歴史と文化(16)』(2012.3.31)、pp143-169。
- 18) 吳宏明、「日本統治下台湾の日本人教員－台湾總督府講習員をめぐる」、『日本統治下台湾の教育認識－書房・公学校を中心に』第 6 章(2016.3.30)、p159。

- 19) 鄭安晞(研究代表)、「黃蝶翠谷及周邊地區常民生活路徑調查」成果報告書報告書(2016.6)、內政部營建署壽山國家自然公園委託研究、pp37-40。
- 20) 台湾日日新報社、「美濃庄民の義挙 校長の記念碑建立」、『台湾日日新報』(1921年9月8日)。
- 21) 美濃鎮誌編纂委員會編纂、『美濃鎮誌』(1997)、pp410-415。
- 22) 高雄市龍肚国民小学教頭黃鴻松氏の聞き取り調査記録による(2019.10.1取得)。
- 23) 台湾總督府文書、「新埤頭分校設立認可(張添倬外一)」(1916-03-01)、〈大正五年臺灣總督府公文類纂永久保存第四十四卷教育〉、《臺灣總督府檔案 總督府公文類纂》、國史館臺灣文獻館、典藏號:00002516003。
- 24) 李鎧揚、「日治前期台湾公学校的經費籌措與財務運作(1898-1920)」、『台湾文獻』64卷第1期(2013.3)、p60。
- 25) 同上24、p67。
- 26) 同上24、pp41-78。
- 27) 『阿緞序報(大正九年一月至八月)』409号(1920.4.26)、「大正八年以降学校關係寄付調」。
- 28) 美濃庄役場編刊、『美濃庄要覽』(1938年)、pp67-68。吉洋国民小学、「高雄市美濃區吉洋國民小學-百年大事記」、<http://163.16.169.9/02/32-jyp%20history.pdf>(2019.10.1取得)。
- 29) 高雄市龍肚国民小学教頭黃鴻松氏の聞き取り調査記録による、2019.10.1。
- 30) 鄭安晞(研究代表)、「黃蝶翠谷及周邊地區常民生活路徑調查」成果報告書報告書(2016.6)、內政部營建署壽山國家自然公園委託研究、pp37-40。

Japanese Teachers in Southern Taiwan under Colonial Rule: The Case of Principal Kamekichi Kurokawa

CHEN, Hung wen

Kamekichi Kurokawa was born in Gunma and was a Japanese teacher who went to Colonial Taiwan in 1899. He worked for public schools (for Taiwanese children) in southern Taiwan and remote islands until his death in November, 1920. Mino public school in Kaohsiung was the last school he worked for. When he was in Mino, he was involved in the establishment of three branch schools and was trusted by the local community. After the death of Kurokawa, a monument was built by local residents, and the students of Mino public school visited on the day of his death every year. After Japanese colonial rule, the location of this monument was forgotten, and was discovered again in 2015. The existence of “Principal Kurokawa” was also remembered again. However, there still remain some questions as to the factual correctness of the documents of Kurokawa. By researching into the documents again, I clarified his contribution and the meaning of the monument to Mino people under Japanese colonial rule.

Keywords: Taiwan, colonial education, public elementary school, history of school teachers, local education